







放課後、俺は奉仕部の二人に催眠をかけ、また生オナホとして使ってやることにした。

男  
「雪ノ下さんは騎乗位で由比ヶ浜さんはキスして俺を楽しませてね」

雪乃&結衣  
「はい」

雪乃はなんの躊躇いもなく俺にまたがり、チンポを自身の秘部に挿入した。





「雪ノ下さんあれから  
言いつけ通り  
練習してる？」

「ええあれから  
毎日膣トレしてるわ♥  
体力も付けようと思って  
スクワットも取り入れてる♥」

確かに雪乃の秘部は  
処女を奪ってやった時よりも  
弾力に富み、膣圧が増していた。

「そろそろ頃合いかな」

俺は二人が  
深く催眠に掛かっていることを  
確信し、部分解除する。

タッ  
タッ  
タッ





「……!!  
またあなた……!  
私たちに何をしたの……!!」

「……!!  
ちよっ!なんで  
あたしキスしてるの  
キモい……!!」

二人の少女は激しい嫌悪を  
俺に向けてきた。

「やめたければ  
やめていいよ  
できるものならね」





「ほんとマジでありえないし  
でももうちょっとだけ……♡  
ぢゅるっ♡ちゅう♡」

結衣は舌を絡めさせ  
口の中に入れてきた。  
勃起した乳首が俺の腕に擦れる。  
発情しているようだ。

「あっ♡あぐっ♡  
ゆ……由比ヶ浜さんに  
何をしたの……？」

「簡単なことだよ  
キスをすればするほど  
俺に夢中になる暗示を  
掛けただけさ  
もちろん雪ノ下さんにもかけてる」

「なっ……」





「雪ノ下さんにかけてた暗示は『ザーメンを中出しされると俺に夢中になる』だ」

「そ…そんな♡  
あっ♡あぐっ♡」

雪乃は歯を食いしばり  
快楽に抗っていた。

「キス♡好き♡  
もっ♡と…♡♡♡  
唾液もっ♡とちようだい♡♡」

「んふっ♡くっ♡  
由比ヶ浜さん気をしっ♡かり♡」





「そんな嫌なのに  
腰がとまらない♡  
奥を突かれるたびに  
千ポがもっと  
欲しくなる♡♡」

「ダメ♡♡  
いきたくないのに  
イってしまっ♡♡♡」

「オラっ  
イけっ!!  
二人ともっ!!」







あーあーあーあーあー

んあーい  
んあーい

どびゅっ♡びゅく♡  
びゅるっ♡びゅく♡  
♡びゅく♡びゅくん♡  
♡♡

んあーい

んあーい

んあーい

んあーい



「んはっ♡はっ♡  
すごい♡  
あなたのオキンプオ汁が…  
すごく熱い…♡♡♡」

「どう雪ノ下さん  
中出しされた感想は…？」

「し…仕方ないわね♡  
奉仕部としてこれから  
毎日あなたのキンプオを  
満足させるわ…♡」





























放課後、俺は奉仕部の二人に催眠をかけ、また生オナホとして使ってやることにした。

男  
「雪ノ下さんは騎乗位で由比ヶ浜さんはキスして俺を楽しませてね」

雪乃&結衣  
「はい」

雪乃はなんの躊躇いもなく俺にまたがり、チンポを自身の秘部に挿入した。





「雪ノ下さんあれから  
言いつけ通り  
練習してる？」

「ええあれから  
毎日膣トレしてるわ♥  
体力も付けようと思って  
スクワットも取り入れてる♥」

確かに雪乃の秘部は  
処女を奪ってやった時よりも  
弾力に富み、膣圧が増していた。

「そろそろ頃合いかな」

俺は二人が  
深く催眠に掛かっていることを  
確信し、部分解除する。

タッ  
タッ  
タッ





「……!!  
またあなた……!  
私たちに何をしたの……!!」

「……!!  
ちよっ!なんで  
あたしキスしてるの  
キモい……!!」

二人の少女は激しい嫌悪を  
俺に向けてきた。

「やめたければ  
やめていいよ  
できるものならね」





「ほんとマジでありえないし  
でももうちょっとだけ……♡  
ぢゅるっ♡ちゅう♡」

結衣は舌を絡めさせ  
口の中に入れてきた。  
勃起した乳首が俺の腕に擦れる。  
発情しているようだ。

「あっ♡あぐっ♡  
ゆ……由比ヶ浜さんに  
何をしたの……？」

「簡単なことだよ  
キスをすればするほど  
俺に夢中になる暗示を  
掛けただけさ  
もちろん雪ノ下さんにもかけてる」

「なっ……」





「雪ノ下さんにかけてた暗示は『ザーメンを中出しされると俺に夢中になる』だ」

「そ…そんな♡  
あっ♡あぐっ♡」

雪乃は歯を食いしばり  
快楽に抗っていた。

「キス♡好き♡  
もっ♡と…♡♡♡  
唾液もっ♡とちようだい♡♡」

「んふっ♡くっ♡  
由比ヶ浜さん気をしっ♡かり♡」





「そんな嫌なのに  
腰がとまらない♡  
奥を突かれるたびに  
千ポがもっと  
欲しくなる♡♡」

「ダメ♡♡  
いきたくないのに  
イってしまっ♡♡♡」

「オラっ  
イけっ!!  
二人ともっ!!」







ああああああ

ぐんぐんぐん

んんんんん

どびゅっ♡びゅく♡  
びゅるっ♡びゅく♡  
♡びゅく♡びゅくん♡  
♡♡

あひやあひや

あひや

んんんんん

んんんんん



「んはっ♡はっ♡  
すごい♡  
あなたのオキンプオ汁が…  
すごく熱い…♡♡♡」

「どう雪ノ下さん  
中出しされた感想は…？」

「し…仕方ないわね♡  
奉仕部としてこれから  
毎日あなたのキンプオを  
満足させるわ…♡」





あの後  
結衣がケツを振って  
おねだりしてきたから  
恵んでやることにした。

「このちに  
もつとケツを出して」

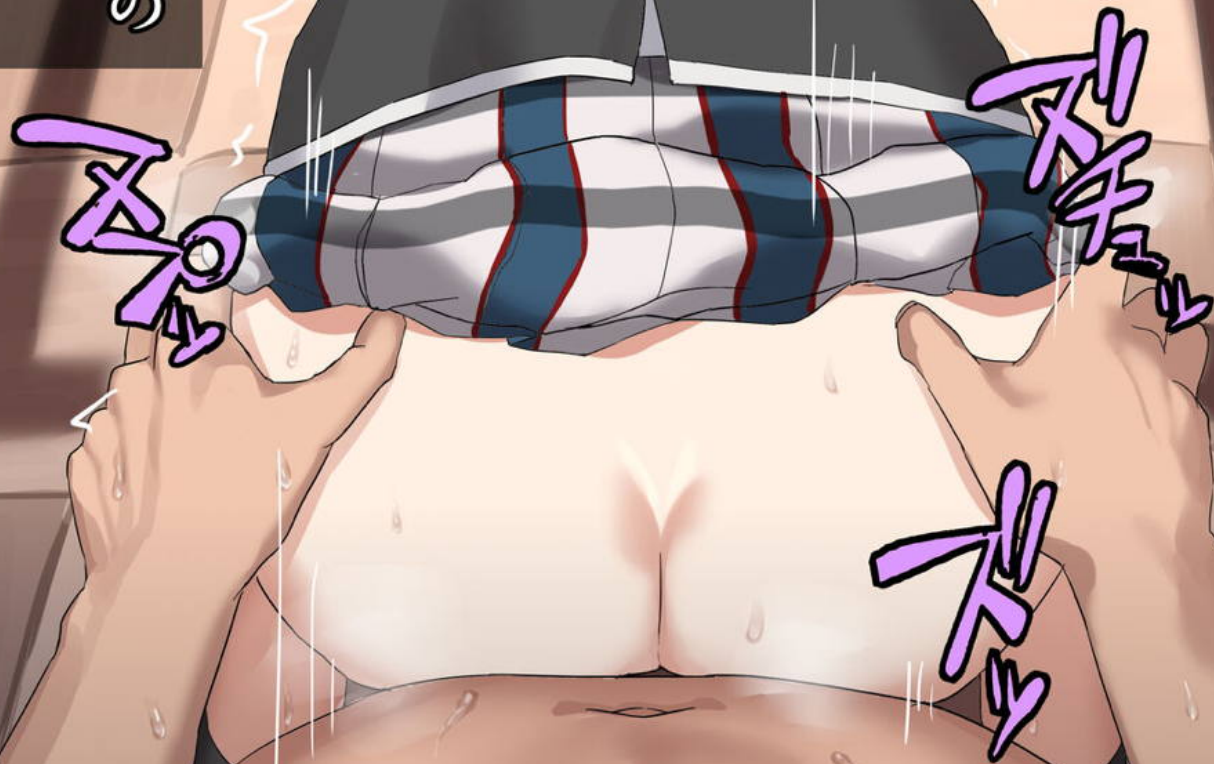
「はい♡」



「すげえ  
もうまんこの中  
ぐじゅぐじゅだね」

「ゆきのんが  
エツ干してた時から  
ずっとがマンしてた……..  
あっ♡」

発情しきつた結衣の  
秘部が必死に  
絡みついてくる。

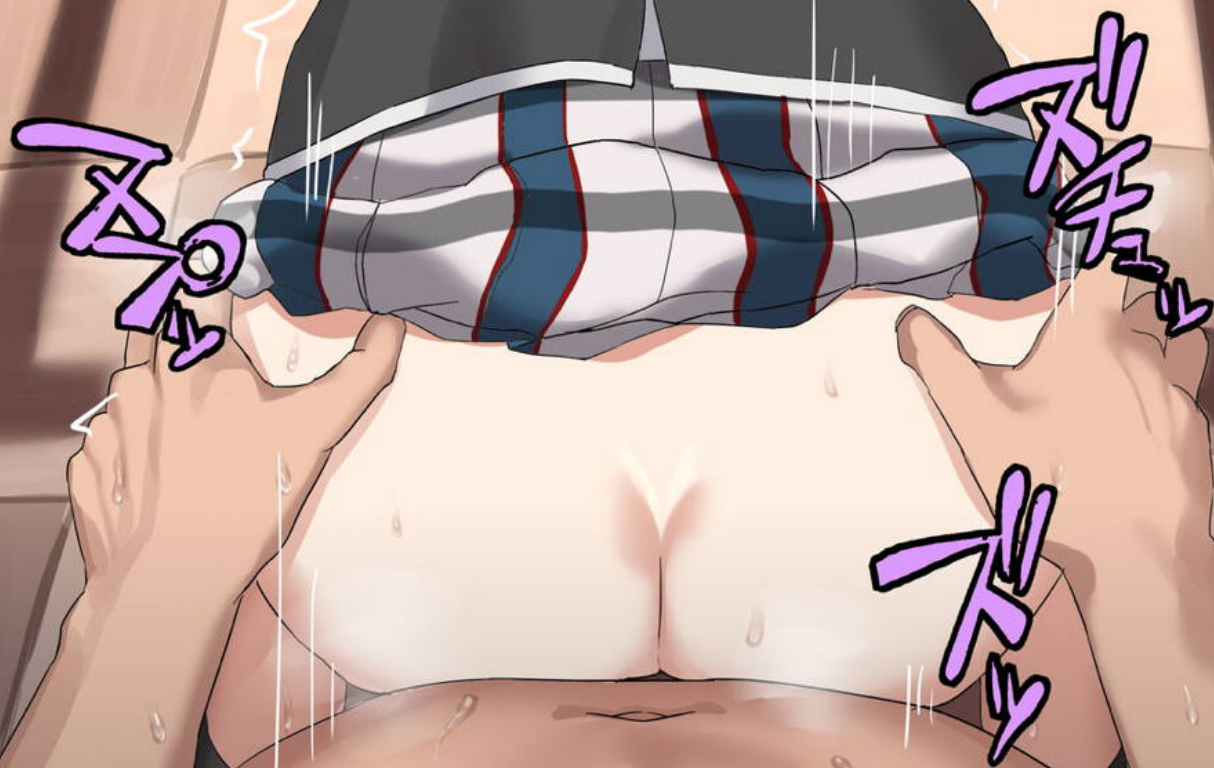




「最初の処女の時と  
違って随分チンポの  
扱いがうまくなつたね」

「いろいろエツ干な  
事教えてくれたから  
あっ♡♡」

「でもさっきは  
にらみつけてきたよね」

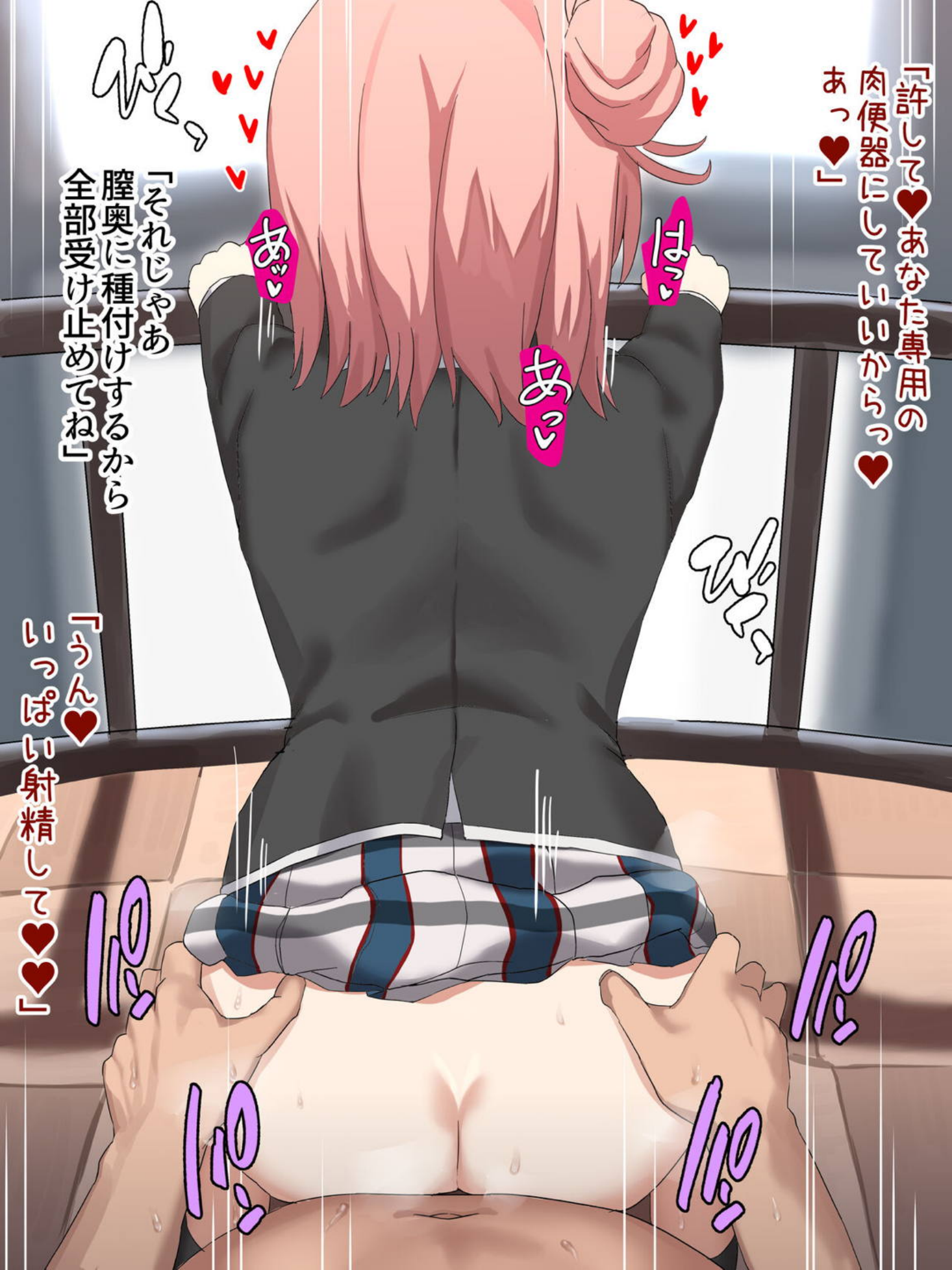




「許して♥あなた専用の肉便器にしているからっ♥ あっ♥」

「それじゃあ膣奥に種付けするから全部受け止めてね」

「うん♥ いっぱい射精して♥♥」





「射精すぞっ!!」





「うおっ！  
すごい締め付け…！  
由比ヶ浜さんがっつき  
すぎだつて…！」

♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡

「そんなこと  
言われても  
あっ♡あっ♡」





「あっ♡はあっ♡  
精液がもれちゃう……♡♡♡」

ん  
く♡

「すごいマン尻♡  
また溜まったら  
使ってやるからな……」

ん  
く♡

ん  
く♡











































